

# 富士精版印刷株式会社



代表取締役社長 里永 健一郎 氏

富士精版印刷株式会社は1950年創業、本年65周年を迎えている。企画から完成品までの社内一貫生産体制でワンストップサービスを提供している。技術向上を第一とする同社は、すべての経営情報や技術を公開することにより、お客様はもとより業界からも熱い信頼を寄せられている。

本年9月、同社は生産効率向上のために、システム38S(A横全判輪転機)を導入。その導入理由と成果について、里永社長、中野光男 専務取締役、山崎重次 常務取締役、真鍋隆司 取締役製造部長兼品質管理室長、若林栄樹 顧問、市島工場の横山浩士 工場長代理と田村日出世 部長代理にお聞きした。

## 原因を追求して生産効率向上へ。 最新のシステム38Sを導入し、 紙の良さにこだわって技術向上に挑戦。

本社／大阪府大阪市淀川区西宮原2-4-33  
http://www.fujiseihan.co.jp/  
TEL／06-6394-1181  
市島工場／兵庫県丹波市市島町矢代字才上377-1



富士精版印刷 市島工場

### 情報公開が会社の信頼を高める

富士精版印刷(株)の経営理念は、「商いは高利をとらず 正直に よき品を売れ 未は繁盛」である。これを実践する経営方針に「技術向上第一主義」「事故は隠すな。正直に報告し、原因を追求せよ」を掲げるとともに、すべての企業活動の情報公開に踏み切っている。

その取り組みの一つに、1958年に発行した社内報「富士」がある。

里永社長は、「創業後の様々な不祥事や出来事の経験を通して、お客様に対して健全な経営の実践をお知らせすることの大切さを痛感したそうです。そこで、財務をすべて公開しよう、事故は隠さず報告しようという考えから、社内報を開始しました。年3回の発行ですが、今では社内外への情報公開を担うツールとして、同社の信頼を培う広報誌・PR誌の役割を果たしています」と語る。

近年、CSRが重要視されているが、同社は創業当初から時代を先取りして取り組んでいたことになる。

中野専務は、「経営数値の公開は信用を高めることにつながり、印刷技術や事故の公開は印刷業界の発展につながります。それが当社の発展、信頼にもつながっていきます。当社の技術開発には『完全棒積み1万枚』や『常温ワンウェイシステム』などがあります。これらは特許に値する技術革新ですが、すべてをオープン化し、多くの印刷会社で活用されています」と語る。

同社開発の技術は、印刷の省力化や省人化、環境対応の実現に寄与し、印刷業界の発展に貢献している。



石川 忠 様



真鍋 隆司 様



若林 栄樹 様



山崎 重次 様

真鍋製造本部長は、「正確な製品をお届けするという考えから、印刷技術をはじめ事故の事例や原因、損失金額などをまとめた本「品質管理365日」を作成しています。現在6刊目ですが、無償で配本し、営業マンのマニュアルとしても活用されています」と語る。

同社の再発防止の情報公開は、多くの業界から支持を得ているという。

### 小ロットを加速させる輪転機

技術向上第一主義を貫く同社は、本年9月に生産効率の上がない既設機を更新する形でA横全判輪転機システム38Sを導入。導入機には、オフ輪統合制御システムAI-Link、品質検査装置PQA-Wが搭載されている。現在、輪転機の市島工場ではA輪3台・B輪1台のKOMORI機が稼働している。

「生産効率向上、品質向上、小ロットの対応が課題でした」と言う里永社長に導入の理由と成果を挙げていただいた。

#### 《導入理由》

- 従来機で20分かかっていた版交換がFull-APCで2分以内に完了する
- ロス率や準備時間の削減、印刷速度向上で生産効率が大幅に向上する
- 高品質印刷に対応でき、印刷・加工ともに安定した製品が提供できる
- 増加傾向の小ロットに対応できる

#### 《導入成果》

- 市島工場の生産効率は1.4倍に向上し、大きなメリットとなっている
- 小ロット・短納期に対応でき、収益向上に貢献している
- 色の再現性が高く、枚葉機とのカラーマッチング精度が高められる
- 輪転特有の網点が細くなる現象がほとんどなく、胴洗浄後の色の変化も非常に良くなっている

市島工場を立ち上げた若林顧問は、「システム38Sは、小ロット対応を加速させる印刷機だと思っています。最高の印刷品質を実現し、折り精度、生産効率も格段に向上しています。5,000部の仕事にも対応しており、台数で加工高を上げることができます」と語り、生産性の良さを評価された。

### 従来機との格段の違いを実感

横山工場長代理に、システム38S搭載のAI-Linkについて伺った。

「現場からの強い要望で搭載しました。AI-Linkは一度やった仕事の色や折りなどオーダー履歴をすべて記憶しており、オペレーターはボタンを押すだけで簡単に前回同様の印刷ができます。リピートオーダーもボタン一つでセットが完了できます。しかも、台数をこなせばこなすほど機械が仕事を覚えて進化しますから、オペレーターは安心して作業ができます。無駄な検品や時間を費やすことがなくなり、従来機との格段の違いを実感しています。」

田村部長代理はPQA-WIについて、「微細なホコリやインキ落ちなどの不良をリアルタイムで検知でき、どこに不良が発生しているのかもすぐにモニ

ター画面で確認できます。仮に不良が出た場合でも、印刷不良品の出荷を未然に防ぐことができますので、安心して印刷作業に集中できます」と語る。

営業について山崎常務は、「営業にとって、生産効率の大幅向上と印刷品質アップは、さらなる信頼を築き上げる力になります。特に小ロット対応はこれからの大きな武器になります」と笑顔で語られた。

### 紙メディアで社会に貢献する

里永社長に今後について伺った。

「システム38Sの本稼働はまだ1カ月ですが、既存機に比べて生産効率は1.4倍に向上しています。さらに最低でも1.6倍まで上げていきたい。網点の再現性が良いので、240線の高細線印刷も進めたいと考えています。」

2020年に東京オリンピック開催を控えており、今後、様々な需要が想定されます。その営業体制強化のために、この10月に東京の営業拠点である子会社を本社に統合しました。システム38Sは、その受注拡大への対応設備として大いに期待しています」と語る里永社長は、温かさがある紙の良さにこだわって、紙メディアによる社会への貢献に情熱を注いでいる。



横山工場長代理(右端)、田村部長代理(右から2人目)、スタッフの皆様とシステム38S(A横全判両面輪転機)